
モノガタライズ

オカザキレオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノガタライズ

【Nコード】

N6523W

【作者名】

オカザキレオ

【あらすじ】

短編から中編の色々な形のオカザキワールドを集めていきます。気に入ったらものがあつたら続編あるかも。とりあえずは旧作も混ぜて気長に適当に。

夏休み

夏休み

夏休みが始まって、僕は睡眠をむさぼっていた。普段、バイトと学校、部活との忙しさからゆっくり眠ることがないので、ここぞとばかりに微睡む。外では子供の声とラジオ体操が流れている。夏はバイトも倍になるし、部活も忙しくなる。写真部に所属してる僕は、秋のコンテストに向けて作品を撮っていかないといけない。

「陽一朗アニ、起きろよ」

一番下の弟の晃が声をかける。

「飯なら昨日、用意してたろ。みんなで食っとけ」

「でもね陽アニ」

と長女的美樹が声をかけた。

「ラジオ体操に行けよ」

と邪険に扱う。

「兄さん、いい加減にしてくれよ」

次男の陽太がため息をつく。

「そうだよ、待たせちゃ可哀想だよ」

と次女の亜香里が僕をゆする。

「寝かせろ．．．．．また昼からバイトなんだよ．．．．．」

「」

「起きないと後悔するぞ」

と晃が耳元に囁く。

「起こすとお前ら後悔するぞ」

すでに脅しに近い台詞を僕は呟く。

「いいの」

聞き覚えのある声がした。「ゆっくり寝かせてあげて。私、待ってるから」

「え？」

僕は間拔けな顔で、起き上がった。

「志乃？」

「おはよう、陽ちゃん」

彼女はにっこりと笑った。

志乃と僕は幼なじみだ。幼稚園の頃からずっと一緒に遊んできた。どちらかと言うと僕が志乃を連れ回していたというパターンが多かったけど。高校から別になって会う機会はそんなに多くはなかったから、突然懐かしい顔が目の前にあって、驚きを通り越して、僕は間拔けな顔で啞然とするしかない。

学校が違うだけが会わなくなった理由じゃない。

一つは志乃に彼氏ができたこと。

志乃のことが好きだった僕は、あえて志乃から遠ざかっていた。一度志乃に紹介された事があるが、北村という気さくで咲くような笑顔を見せるいい男だった。二人で笑っている姿は眩しくて、ずっと大切にしていた仄かな気持ちを殺すことはそんなに難しくなかった。

もう一つは両親が交通事故でなくなったからだ。あっさりと、あっけなく。

長男僕17歳、次男陽大15歳、長女美樹14歳、三男晃12歳、次女亜香里10歳を抱えて、親の保険金だけでは生活できるわけもなく、親戚同士の関係も希薄で連絡はとれず、僕が働くしかないというわけだ。最初の一ヶ月は放心状態で、それを振り切るためにバ

イトに励んでいた。が、次第に家族の顔を見てみると、コイツラのために仕事をできるように頑張って来た。

悲しくないわけじゃない。ただ、前を向こう。と陽大に背中を叩かれたのが一度や二度じゃない。陽大は新聞配達もしているが、そろそろ辞めさせようと思っている。高校受験を控えているのだから、そろそろ勉強に集中させなくてはいけない。陽大は嫌がることは目に見えているが。

それでも長兄として、こいつらを守りたいと本気で思っていた。

僕と志乃は強い日差しの中を黙々と歩いた。

彼女の手にある向日葵が全てを物語っていた。少し早いが、二人で父さんと母さんの墓へと向かう。向日葵は父さんと母さんが一番好きな花。僕の名前の陽一郎は、そんな向日葵を咲かせるような太陽のような子であるように、と名付けたらしい。名前の意味付けですでに負けている。

「陽ちゃん」

「ん？」

「ごめんね。陽ちゃんが大変な時に、何もできなくて」

僕は志乃を見た。通夜でも葬式でも一言も話せなかったが、それは僕の追いつめられた精神状態が原因だった気もする。今なら、自然に笑える。現実として理解できるほどに冷静になれたのは兄弟達のおかげだ。

「志乃が気にする事じゃないよ」

僕は日差しの強さに目をつぶった。

「陽ちゃん」

「え？」

僕は志乃を見た。志乃が泣きそうな目で、僕を見ていた。その目

に吸い込まれそうになる。

「志乃？」

「ごめん、私、卑怯だね」

と向日葵の花がぼろりと落ちる。志乃の目から涙がこぼれ落ちた。止めどなく、止まらない。僕は呆然と志乃を見つめて、動けなくなつた。

「私、卑怯だ。ごめん、ごめんね」

と泣いてばかりいる志乃に、僕はどうしていいのか分からない。ただ

「どうしたんだ？」

と声をかけた。志乃の体が震えている。

「陽ちゃんね、会う機会が少なくなつてから、ずっと陽ちゃんの事考えてたの。陽ちゃんが意識して私を避けていたのも分かったの。陽ちゃん優しいから、すぐそういう事に気を回すから」

そういうこと……。僕は黙つて志乃の声を聞いた。

「でもそうなつてから、初めて気付いたの。陽ちゃんと一緒にじゃない時間がどれだけ苦しいかって」

志乃の声は嗚咽になった。「陽ちゃん大変なのに。北村君も傷つけたし……」

あとは言葉にならず、涙に変わった。

「卑怯、私、卑怯だよ、ごめんね、陽ちゃん、ごめんね、ごめんね、ごめん……」

僕は志乃を抱きしめて、その言葉を塞いだ。

――陽一郎。

父さんが昔言つた言葉を思いだした。

下の兄弟を守ってあげるんだぞ。そして志乃ちゃんもな。男ならそれくらいできるな。

幼い僕はコクンと頷いた。手には志乃の小さい温もりが伝わっている。

――陽一郎。

母さんが言った。花はね、大切にしないと枯れちゃうの。でも大切にすぎても枯れちゃうの。

陽一郎のお花は志乃ちゃんかしら？

僕はコクリとうなずいた。志乃が嬉しそうに笑った。

「志乃？」

僕は向日葵を拾い上げて言った。「行こう？」

「うん」

と言いつつ、志乃は僕から離れようとしなかった。

時間が止まったように。

熱くて仕方ないほどの日差しなのに、伝わる温もりはイヤじゃなかった。

「志乃」

「なに、陽ちゃん？」

「今度、写真とっていい？」

「写真？」

「そう、写真」

僕はもう一度、笑った。大切な人の表情を大切にしたいから。

花はね、大切にしないと枯れちゃうの。

でも大切にしすぎても枯れちゃうの。

陽一郎のお花は志乃ちゃんかしら？

僕は無造作にカメラのシャッターを切り志乃の表情を撮る。
照れたような笑顔。
懐かしい空気を僕は感じていた。

墓前の向日葵が優しく、僕らに微笑んでくれているような気がした。

夏休み（後書き）

過去作品（ewbページ）からの掲載なのでちと恥ずかしいですが、
名刺替わりとして。

ホットミルク

くしゅん。くしゃみが出る。

熱で意識が朦朧としている感じた。朝から何も食べていないのだから当然だが食欲も湧かない。ただ、ぼーっとベットに横になり天井を睨んでは、ため息をつく。

「寝ている場合じゃなんだけどなあ」

と呟く。その声が枯れていた。

今朝、悪友からバイト禁止令が出た。昨日も40度の熱があつても、平気でバイトをしていたツケが、今まわってきた感じた。ふらふらで立っている事もままならない。

悪友は呆れ半分怒り半分の表情で、学校とバイトは休むように――――命令し、学校へ登校していった。

悪友が朝食にお粥を用意してくれたが、それに手つをけず、無駄に時間だけを食い潰していた。

「しかし働かないと、金が無いしなあ」

ジレンマ。ため息である。

と玄関をノックする音がする。立ち上がる気力が無い。と、鍵がカチャリと音をたてて、玄関のドアが開いた。悪友が帰ってきたのかと思つたが、その予想は見事に裏切られた。

「愛？」

とその子の名前を呼んだ。小柄な愛が心配そうに玄の傍に真つ先に駆け寄ってきた。

「玄君、大丈夫？」

「お前、学校は・・・？」

「今日は半日で休みだよ、こういう日に限って休むんだから」

「・・・・・・・・・・休みたくて休んだわけじゃ・・・」

と立ち上がろうとして、視界がぐるぐると回った。慌てて、愛が

玄の体を支えた。

「無理しちゃ駄目だよ。あ、朝ご飯も食べてないし！」

「食いたくないんだよ」

「でも食べないとよくならないよ」

と愛はじつと玄の目の奥底まで見つめる。玄は照れたように視線を外した。

「それより、銀は？」

「楓ちゃんと瞳とお昼食べてから帰るって」

「アイツは俺を病人として扱っているのか、本当に？」

友情を疑いたくなる瞬間である。

「だから私が来たんだよ？」

にっこりと愛は笑う。

「別に銀達と一緒にいてもよかったんだぞ？」

愛は首を振った。

「そんなことしたら、玄君、ご飯も何も食べないでバイトに行こうとするでしょ？ だから銀君にお願いされたの」

さすが悪友。体力が回復したらまさに、その行動を移す予定だっただけに反論の余地は無い。

「凶星でしょ？」

愛がからかうように笑った。玄にできるせめてもの抵抗は「うるせえ」

と悪態をつくのみだが、それすら愛には予想の反応、微笑んで聞き流す。

「何か食べたいのある？」

「無い」

即答。じつと愛は玄を睨んだ。その顔が少し怒っている。

「玄君、食べないとよくならないよ」

「……………いらない」

「玄君」

今度は本気で怒っている。玄は息を吐きだし、手を上げて降参を

示した。

「分かったよ」

と渋々と言うと、愛の表情が笑顔になる。

「よしと。それじゃ、私が腕によりをかけるからね」

と早くも腕まくりをする。「その前に何か暖かい飲み物、作ろうか？」

「ん・・・じゃ、コーヒーをブラックで」

じとり、ともはや愛は言葉もなく睨んでいる。

「何だよ、何ならいいんだよ」

と玄は膨れる。愛はじつと玄を見つめる。玄は目をそらす。しかし愛は厳しい目で玄を見据えた。

「玄君は、もつと体を大切にしなきゃ駄目だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無理ばかりしてる」

「でもな！」

「玄君」

愛の言葉は玄を諭すように重く、のしかかった。苦笑する。どうも、愛には勝てない。悪友もそれを見越して、愛に頼んだと思われる。姑息な手段を使いやがってと、心の中で悪態をつきつつ、諦めの境地である。もつとも、自分が動ける状態でないのも、自覚している。

「分かったよ」

と半ばヤケクソ気味に、ベットに横になった。愛がクスリと笑みをこぼすのが見えた。が、愛は玄に言葉をかけず、そのままキッチンへ行ってしまふ。

コトコトと鍋で何かを煮ている音がした。

と、愛がマグカップを手に戻ってくる。

「ん？」

「ホットミルク。体、暖まるよ」

「俺はコーヒーの方がいいんだけどなあ」

とその口調には情けなさすら滲むが、受け取って口をつける。じわり、と体に熱が伝わっていくのを感じる。ほっと一息つく。

「たまにはいいでしょ？」

と愛もホットミルクを口にした。愛はコーヒーが飲めないの、いつもホットミルクを飲む。玄はそんな愛を見て「お子様」とからかう。そして、ぷーっと風船のように頬を膨らませて愛はいつも抗議する。それがたまらず、可笑しかった。

「たまに休まないと、体が可哀想だよ？」

じつと愛は玄を見つめる。

「分かってる」

と仕方なさげに言う。愛はにつこりと満面の笑みを浮かべた。

「今、栄養のあるモノ作るからね」

と言って、立ちかけた瞬間だった。玄が、瞼を閉じて愛の肩にもたれかかった。

「げ、玄君？」

と慌てるが、その後に聞こえてくる静かな寝息に、愛は優しく微笑んだ。玄のその手に持っているマグカップをそっと取り、ゆっくりとベットに寝かせてあげる。

愛はそつと玄の首筋に手を触れた。普段の玄なら、意地になって、その行為すら許さない。想像以上に熱があるのに愛は驚いた。

「まったく無理ばかりするんだから」

と玄を見つめて、そう言う。「心配するのは誰だと思っているの、まったく」

ちよん、と指で鼻を弾く。玄は身動き一つせず、眠りの底へと落ちていた。何だかんだいって、安心したのかもしれない。そんな玄を見て、愛も少し安心した気がした。

「今、美味しいモノを作るからね。風邪ひいている暇なんか無いくらい！」

とぱたぱたと足音をたてて、キッチンへと走っていった。

ホットミルク（後書き）

これも別の連載の中の人たちの短編。この子達は好きなのでまた書きたい。とりあえずは2作、新作をじゅんびしてますが過去作で箸休め（表現が違う？） あ、なんか可愛い恋愛小説ネットであつたら教えて下さい。ここで言うのも何か違うが（笑）

ふわふわ浮かせて

ふわふわ浮かせて

*

僕はきょんととして、彼女の言葉を聞く。思わず、淹れた紅茶をこぼしそうになった。

「私は君がいてくれるから、浮けるんだよ」

にこにこと笑う。僕はやっぱり紅茶をこぼして、慌てて拭く。もつたいないもつたいない。

「浮くってどこに？」

新しい研究なのかと思った。彼女はいつも難しい数式と取り組んでは、一部分だけ重力を軽くする方法について研究してるらしい。今は小さな小屋程度の場所で、月の重力への出力に挑戦していると言っていたのを思い出す。

すごい、と思う。僕はお菓子しか作れない。

「君の場所に」

「君のところに」

「君が感じられる場所に」

まくしたてて、僕へダイヴする。今度はすかさず、紅茶をテーブルの上に置く。そして受け止める。まるで小犬のように僕にすりよる君を見ながら、いつも感じるのは天才科学者も人間なんだ、という事。

そして僕は天才科学者じゃなくて、僕の紅茶とお菓子を食べてくれる女の子……マキセ・ハルナという子が好きなんだ、という事を自覚している。

「でもね」

君は真剣な顔で僕を見る。数式を睨んでいる時よりも真剣。本当に切りつけられたような視線で僕を射る。

「君がいなくなったら、私は沈んでしまうから」

「うん」

「本当に沈んでしまうから」

「うん」

沈む、という意味がまだよく分からなかった。彼女は自分で命を潰すような人じゃない。ハルナは自分の存在の重さと研究をもしかしたら、世界で唯一導き出せる人間だということを自覚している。

僕とは違う。

僕は数あるお菓子の一つだ。ハルナが好きだと言ってくれたお菓子の一つ。いつか在庫に埋もれて、新しいお菓子に目がいつて、僕の方が沈むだろう。でも、ハルナの沈むという意味はそういう意味じゃない。僕は自覚が足り無すぎた。

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

ハルナは沈んだ。

スイッチが切れた感じた。何をしても受け付けない。理由は僕がお店で、お客さんの女子高生に「好きです」と言われている場面を目撃されたから。まんざらでもない僕の顔を見て、彼女は何を言うでもなく店を後にした。怒ってるふうでもなく、悲しんでるふうでもなく。

そう思っていた僕は馬鹿だった。

帰ると、ハルナは沈んでいた。虚ろな目で、ずっと一点を見ている。腫れた目で、僕を見る。でも、僕の事はまるで視界にはいらない。

いように、別のものを見ている。

沈んでいく。それが分かった。科学者のハルナにあるはずの強さがなかった。

僕は言葉をかけた。

彼女はそれを返さない。

そんなの初めてで、僕は困惑した。

科学者マキノ・ハルナは強い人だ。天才で、世界の財産で、きっと宇宙に飛び出す人類に貢献する偉大な人物として歴史に記される。一方の僕は単なるお菓子職人。本来なら釣り合いなんかとれるはずもない。僕はいつもそれを負い目に感じていた。

だから、僕はお菓子の一つでいつか飽きたら、在庫の中に埋もれてしまう。

沈んで沈んで、もうハルナは見つけてくれない。そう思っていた。

「……………」

なにかハルナが喋った。僕は聞き取れなくて、もう一回聞く。

「なに？」

「ゆ」

「え？」

「ゆるさない」

「は？」

「ゆるさない！ 違う子にへらへらした顔が許せない」

「あの、ハルナさん……？」

「私……コウタ君に言っただよ。貴方がいないと沈むって。貴方がいてくれたら浮くって」

「うん、でもさ、あの子、高校生だよ？ そんな本気で言ってるわけないし」

「私の言葉も本気じゃないと思ってたの？」

「え？」

「女の子が心の中も知らない人に好意を伝える事が、何でもない事だと思ってるの？」

「・・・・・・」

「コウタ君」

「はい」

「私を浮かせて」

「はい？」

「抱っこして、空へ浮かせて」

「あの・・・ハルナさん」

「何？」

「僕の非力さを覚えていると思いますが」

「私を月に連れて行って」

「あの・・・無理でしょ、それは」

「無理じゃないよ。コウタ君が抱っこして、お外まで連れて行ってくれたら、今度は私が絶対、コウタ君を宇宙へ連れ出すもの」

真顔でそう言う。科学者はそんな事言わない。甘い事は言わない。希望的観測は言わない。初めてお店で会ったとき、ハルナさんはそう言いましたよ？

「私は事実を事実として言ってます」

「事実って？」

「コウタ君が私を浮かせてくれるから」

僕はため息をついて、ハルナさんを抱きしめる。彼女の体は標準的に見て軽いが、僕の体重は標準的に見て圧倒的に軽いので、彼女をお姫様抱っこした時、僕はついふらついてしまう。でも、彼女は落ちまいと僕にぎゅっと、掴まって、多分、僕が転んでもその手は離さないんだろう。

笑顔が戻った。彼女は浮いた。僕は玄関を開けて、靴をはいて、外に出る。階段を降りる。ここで転んだら、二人で入院生活もある。僕なんか見た目からして、骨が脆そうだし。我思う。お菓子の砂糖は骨を溶かす。しかしその前に目の前の女の子が僕を溶かす。月、でてるね」

ふらふらしながら、僕はなんとか彼女に言う。彼女は満面の笑顔

で僕に頷き返す。

「宇宙船ってこんな感じかな」

「え？」

「ふわふわしてて。無重力になったら、こんな感じなのかなって」

「それはハルナさんの領分です。僕はお菓子しか作れないからね」

「じゃあ、宇宙でお菓子を作って」

「無茶言わないでください」

「私、最近思った」

「はい？」

そろそろ手が痺れてきた。

「コウタ君のお菓子食べられない場所には行きたくない」

「また無茶を言って」

「だから旅行に行くのも、コウタ君と一緒にじゃないのなら行かない」

「はいはい」

僕は苦笑い。でも、彼女の目は笑ってない。

「君は私がいなくても平気？」

「……平気じゃないです」

声を絞り出す。それは本心。でも、足もよろけてきた。

「倒れてもいいよ」

「はい？」

「倒れても、私は離さない」

「あの、ハルナさん？」

「それくらいそれくらい、私が君の事を考えているって自覚しても
らわないと」

「あの……？」

「貴方の作るお菓子が好きじゃなくて、作ってくれている貴方が好
きななのよ？」

「う……ん」

「だから、君はお菓子の在庫なんかじゃないの」

お見通し……ですか。

「私がね、一生かけて大切に食べる、私だけのお菓子なんだから」
僕は顔を真つ赤にしながら後ろに倒れた。思わず、彼女を強く抱きしめた。そのせいで、アスファルトにしたたかに、頭を打つ。一瞬、夜空が白く輝いた。

「大丈夫？」

君がそういう事を言いますか？

「痛いのか？」

僕は素直に頷いた。彼女の手が僕の頭をそつと撫でる。

「痛い？」

もう一度、聞く。今度は僕も声を出して「うん」と言った。彼女は嬉しそうに、もう一度、僕の頭を撫でる。

「私はもつと痛かった」

「え？」

「私を浮かせて」

そう僕にまたがって言う彼女は本当に空へ浮いていくように見えた。

空へ浮かんで、宇宙へ浮かんでいくように見えた。

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

ハルナの研究は現実段階になったらしい。彼女は満面の笑顔で僕にプロジェクトの説明をしてくれるが、概要だけでちんぷんかんぷんだ。要は国家規模宇宙ステーションの要となる重力機構の開発を担当する事になるらしい。確かに重力が無いのは不便だ。僕はしみじみとそう言うと、彼女は苦笑した。

「一番はエネルギー炉の安全の為なのよ」

高出力のエネルギーを凝縮している訳だからその扱いは慎重になる。まして実験段階ではない、人の生活する場所として長期的視野で見たら、重力システムは必然だ。人間の体に作用する重力がもたらす精神安定に関する論文もハルナは書いている。機械だけじゃなく、人にも重力は影響する。そして磁場をコントロールする事で、小彗星からの衝突を防衛する防御壁ともなる。まさに命のパイプなのかもしれない。

「ふーん」

と僕は紅茶をすすりながら、聞いている。

彼女は浮こうとしている。青空をぬけて。でも、そこには僕はいない。今、ハルナに僕は必要無い。お菓子を食べる時間も忘れて、数字とにらめっこ。技術者とメールのやりとり。電話の鳴らない日は無い。僕はそんなハルナをただ見つめている。彼女がいつか、お菓子を「いらない」と言う日を。

その声が届く日に怯えていて。でも覚悟していて。

「チームはアメリカで結成するらしいんだ」

にこにこ笑顔の彼女を見て、僕は悟った。ああ、そうか今日がその日なんだ。

彼女が一人で浮く日。

僕は在庫の一つになってしまう日。

「そこで」

「はい？」

「アメリカ国家予算をつぎ込んで、君を私の専属のパティシエにしました」

「あの・・・ハルナさん？」

国家予算の使い方、間違ってますか？ しかもアメリカの予算じゃないですか。僕は日本人だし。

「研究費の一環よ」

「いや、一環とかじゃなくて、使い方を間違ってます」

「私は君のお菓子を食べたい」

「食べられますよ、いつだって」

「食べられない。君は私を遠ざけようとしている」
それもお見通しですか。

「私は君がいないと浮けない」

「いや、それとこれは別問題で……」

しかし彼女はじつと僕を見つめるのみ。そしておもむろに電話へと向かって歩く。

受話器を取り、プッシュを押す。

彼女はもう一度、僕の顔を見る。コールがきつと彼女の耳で鳴り響いている。

相手が出たらしい。

「教授」

と彼女は英語で言った。彼女はわざと僕に聞こえるように、スピーカーを電話に接続していた。

「ハルナ、どうした？」

気むずかしい声。厳しく、威厳のある声。僕にも和訳するぐらいのヒアリング能力はある。とはいえ、これも彼女との生活で培われた能力だ。僕の知らない男と何を話していたのか……英語を必死に勉強した結果の答えは、意味も分からない数式のみ。心配するだけ損というヤツだった。

「今回のプロジェクト、私、降ります」

「は？」

相手も彼女の言っていた意味が分からない様子。クエスチョンマークをスピーカーから僕に飛ばしてくる。僕はなおさら、啞然として彼女を見つめている。その彼女の目が揺れていた。

彼女は沈んでいる。

「ハルナ、君の力なくして宇宙ステーションの開発はありえない。戯れ言はよせ」

もったもです。それがもったもな助言です。なんとか説得してやってください。

ハルナは僕を見てる。

浮かせて――――

そんなに弱い女の子だったんだろうか？ 天才と学界では騒がれ、25歳で今の地位にある。学識の華とすら言われて、去年はノーベル賞も貰った人だ。この年齢での獲得は前代未聞だと言う。それだけハルナの導き出した答えは、人類を宇宙へ出向かせる確実な一歩になっている。

僕は彼女を強い人だと思っていた。

浮かせて――――

もう浮いているのに？ 君は君の力で、その足で。

私は君がいないと沈んでしまうから――――。

本気でそう言ってたんですか？

「パティシエ！」

「は？」

いきなり声は僕に向けられる。怒気をさらにはらんで。

「説得しろ、これは人類の損失だ！」

「あの・・・？」

ハルナさん？ 君って人はもしかして、全部、裏工作していたんですか？

「教授、コウタ君のいない場所なら、どんな栄光も名誉も私は欲しいとは思いません」

「ミスター・コウタっ！ 貴様、アメリカの国家総予算一年分組んでも、条件は飲めないというのか！」

「はい？」

あのハルナさん、一年分って・・・滅茶苦茶、横暴じゃないですか！

「私は」

彼女は受話器を持つ手をぶらりと下げて、絞り出すように言う。

「君が浮かせてくれる。気持ちも未来も、私自身も。君がいらないのなら、未来なんかいらない」

「でもね、ハルナさん！」

「全部、沈んでしまえばいい。君のいない世界なんて」

「……僕はお店で働いているんですよ？ クビになるじゃないですか」

なんて陳腐な反論だ。店と彼女、どちらが大切なんだと罵倒されそうだが、でも、彼女は小さく笑った。微笑んで、僕を溶かすようなそんな感触。彼女は笑みで、僕の言い訳を全て叩き壊してしまう。

「沈んじゃえ。コウタ君のいない世界なんか」

僕は頭を掻く。本心でそう思っているのが分かるから。多分、不器用なんだ。そんな事は分かっている。で、僕は多分、器用すぎる。彼女の気持ちを分かっている、どうしたら彼女を前に前に押してあげられるかを考える。それを彼女は望んでいないのに。

住む世界が違うのは悲しい。君がとても大きくて僕はとても小さいものに思えてしまうから。

できるなら普通に恋をして、普通にお菓子を好きな普通の人を好きになりたかった。

どうして天才科学者なのか、と思う。

どうして君なんだろう、と思う。

「国家予算なんかありません」

僕の結論。彼女の表情が翳る。沈んで沈んで沈んでいくのが分かる。

でも次の言葉で、僕はきっと彼女を浮かせる事ができる。確信がある。

「欲しいのは、ハルナさんです」

もう後戻りできない。彼女の笑顔が――――表情に色が灯るのが分かる。

お菓子作りは面倒だ。それより面倒な世界で一番厄介な恋に翻弄されている。初対面から何気ないふりをしてきたけど、直感が一番正直だった。一緒に生活して、肌でひりひりと感じてきた。

僕は彼女を浮かせるより先に彼女に浮かされている。

彼女は言葉にするより早く、僕に抱きついてきた。

僕はハルナさんを抱き返す。

電話のむこうで、教授がハッピーウェディングを口ずさむ。糞食らえ。でも、と僕は多分、君を偽れない。君が僕を必要ならその選択を受け入れるだろうけど、僕が彼女を放り出すなんて事は有り得ない。ある意味では、天才と言われた彼女を生かすための悪あがき。難しい単語ばかり並べている彼女を見るのは嫌いじゃない。その為ならブラウン管から眺めるだけでもいいと思ってた。

あの人が世界を変える瞬間を見たい。

邪魔なら僕はいつでも消えよう。常にそう考えていたから――

「許さない」

「え？」

「私の目の前から勝手に消えたら許さない」

「誰もそんなこと」

「コウタ君はいつも、そう考えていた」

それも、お見通しですか。

「私はそんな事許さない。でもコウタ君が傍に居てくれたら、世界なんかいくらでも変えてあげる」

「いなかったら？」

「世界を叩き壊す」

魔王か、君は？

「魔王でも悪魔でもなれる。コウタ君が私の傍で笑ってくれるならどんな事でもする。この地球を一瞬で木っ端微塵にする爆弾だって作ってやる」

真剣に真面目に彼女はそう一気に言葉を吐き出す。彼女なら不可能じゃないと思うから、自分の頬に冷や汗が流れるのを感じる。彼女は本気だから、本気でそう言っているから。

僕は答えるかわりに力強く抱きしめた。それを彼女が望んでいることを知っているから。

「私を浮かせて」

*

ふわふわ浮かせて - - - - -

*

「目を開けちゃダメなんですか？」

「ダメ」

彼女は強く言う。冷凍睡眠カプセルに強引に押し込められ、世界で初めて冷凍睡眠を体験し時間を停止させられて、今度は目を閉じることを強要されている。でも、僕は彼女の言うことを忠実に従っている。彼女は何をしようとしているんだろうか？ 分からない。ただ、妙に子どものようにドキドキと期待が入り交じっている。

「コウタ君は」

僕の手を引きながら、言う。

「はい？」

「今、どこにいるか分かる？」

「研究所じゃないんですか？」

「違います」

「じゃ、どこ？」

「当てる」

目隠しされて分かるか！ と反論したいのをこらえて僕は冷静に考える。

「ホワイトハウス」

各国の要人が秘密裏に会合をしているのかもしれない。今回のプロジェクトの事で。だから冷凍保存までして、こうやって僕に時間と位置の感覚を失わせたのかもしれない。僕は知っている。彼女の住む世界と僕の住んでいる世界は違う。彼女の一言で、科学は革

新し、政治はそれに食いつき、何千億ドルもの金がいとも簡単に動いている。

「違います」

と彼女は微苦笑する。「あんなつまらない人とコウタ君を会わせるのは時間の無駄」

あつさりと言ひ捨てる。

「じゃあ？」

「それを教えたらクイズにならない」

「ヒントをください」

「コウタ君に私が見せたかったモノです」

思考を巡らせる。彼女が僕に見せたかったものは一つしかない。それは宇宙だ。でも、それはとつくの昔に見せてもらっている。宇宙にちりばめられた宝石達、それは遙か何億年も前の星のシグナル。生きた証拠。今でこそ宇宙ステーションは各国の研究観察施設ではないが、そこへの移民計画も動き出してる。

「また宇宙？ それとも月？」

「違う」

「じゃあ？」

「教えて欲しい？」

「うん」

「じゃあ、約束できる？」

「なにを、ですか？」

「私たちを一生、幸せにして」

「え？」

「約束して」

ぎゅっと、僕を握る手に力がこもる。僕は戸惑う。私たち・・・？ だけど僕が思うより早く、彼女は僕の目隠しを外していた。そこにあつたのは、光り輝く星でも、水の無い月でも、機械で組み込まれた宇宙ステーションでも無かった。

ベットの上ですやすや寝ている乳児が、そこにいた。髪の毛が産

毛程度で、お猿さんみたいな赤ちゃんがそこに。彼女は僕を見てにこにこ笑う。僕は吞まれてしまったように、次の言葉が出ない。

「どうして？」

「コウタ君と私の子どもです」

「いや・・・え・・・でも？」

「コウタ君がいなくなりそうな気がしたから、いなくならないようにしたの」

反論できない。確かに僕は彼女の邪魔にならないように、色々と思いを巡らせていた。一部の科学者達は、学識の華が、ただ一人の男にうつつを抜かして、研究に集中してないという陰口をしている事を耳に挟んでいる。わざと僕に聞こえるように言ってるのは間違いない。だから・・・・・・秘密裏に懇意の科学者や政治家に話しを通して、僕の特権を剥奪してくれるように頼んだ。

僕にはあまりにも大きすぎる特権だ。ただのお菓子職人が。抱きしめている彼女の存在はそれよりなお大きい。時々、僕は潰されてしまいそうになるから、なおさらこんな決断を下した。僕はただのお菓子職人で、彼女は偉大な科学者で、歴史に名を残す。僕はその邪魔をしている。それを感じるから、科学者達が言うまでもなく身を引こうと思う。

でも彼女はそれを許さない、と言う。

「何回も言う。コウタ君は私を浮かせてくれるの」

「うん」

「科学者の私を好きになつてくれたの？ それとも私を好きになつてくれたの？」

「マキノ・ハルナさんを好きになりました」

「それなら、どうして私から離れようとするの？」

今にも泣きそうな目で僕を見る。冷凍保存なんて言うトップシークレットの技術まで使って言いたかった事はつまり、これなのだ。純粹に素直にまっすぐに彼女は僕に気持ちをつけてくる。躊躇無く、臆さず。もう何度も感じていることだ。この小さな科学者は名

誉よりも栄光よりも、僕なんかを選んでしまう。それは何よりも犯してはいけないミスなのに。

「じゃあ、逆の事を聞くけどいい？」

「え？」

「私の幸せは何だと思うの？」

言葉に詰まる。彼女が幸せに思う事……僕は、彼女が科学に革新をもたらして、歴史に名前を残すことが彼女にとっての幸せになると信じていた。でも、彼女は小さく笑んで首を横に振る。

「コウタ君がいなくなったら」

冷えた声で、でも僕から目を反らさずに呟くように言う。まるでナイフのように研ぎ澄まされた痛みがヒリヒリと感じる声音で、僕の心を突き刺してくれる。

「私、もう多分、ダメ」

小さく笑う。

「浮けない、浮けないよ。コウタ君という重力に縛られてるの。寝ても覚めてもコウタ君なの。コウタ君がいないと重力に縛られて、押し潰されそうなの。でもコウタ君が居てくれると心配は無くなるから、頭に数字がどんどん浮かんでくるの」

僕はじつと彼女の言葉を聞いている。

「もしもね」

彼女は穏やかな笑みを僕に向ける。痛みじゃない。まるで花束を放り投げたような、そんな綺麗な微笑を彼女は浮かべて。何より誰より綺麗だと不覚にも思う。

「私が本当に人類の財産だと言い切ってくれるなら、一人では浮けない私を浮かしてくれるコウタ君も人類の財産なんだよ。だって――」

一滴、頬を伝わり流れた水滴が床に落ちる。それでも彼女は精一杯の笑顔を咲かせて、僕を見つめ続けている。

「君がいなくなる事を考えると苦しいの。何もできないの。そんな

事は考えられないの。君はね、決して在庫なんかじゃないし、私を浮かせてくれるのは君だけなの。君しか私を浮かせられないの。もしも君がここでいなくなったら、私は永遠にサトウ・コウタっていう重力に縛られて、押し潰されて死んじゃう」

ベットで赤ちゃんがいきなり大声をあげて、泣き出す。

「いなくならないで」

彼女はまるで子どものように言う。

「私たちをふわふわ浮かせて」

僕は彼女を力一杯抱きしめた。その頬に手を触れる。とめどなく流れる雫を拭い、そつと唇に唇を重ねて、僕は考える。僕がもしも彼女をふわふわ浮かせているなら、彼女も僕をふわふわ浮かせてくれている。そんな当たり前の事に気付かなかった。自己犠牲はある意味では英雄のようだ。でも、そんな意味無い。

彼女から離れて、僕達の子どもを抱きしめた。

僕達の子どもは、今にも壊れてしまいそうなくらい柔らかい。潰さないように、壊さないように。僕は優しく優しく抱きしめる。何もこんな回りくどい手を使わなくても、と思う。でも、彼女なりに考えて考えた末だったと思う。僕が眠らされてから産むまで彼女は一人で戦った。多分、学者達からの不平不満があつたに違いない。それでも、彼女は迷わず産んだ。僕はなんて弱い父親なんだ、と思うってしまう。

「一人じゃない」

「え？」

「君が傍にいてくれる、って思ったから。この子が生まれたら、きっと君はどこにも行かなくなると信じてたから。君は優しいから」
確信犯。彼女はにつこりと笑んだ。その目にこめられた感情は決して押しつけじゃない。でも、揺らがぬ物を信じている。どうでもいいか、と僕は思った。天才科学者とかお菓子職人だとか、そんなのどうでもいいじゃないかと思う。

僕達の子どもが、小さく、ほんの微かに微笑みを浮かべたように

見えた。どうでもいいよパパ、と僕にそう呟いてくれたような気がした。

そう、どうでもいいんだ。

浮くんだ、僕達はふわふわ。ふわふわと。

僕はその小さな体をベットへ戻して、躊躇無く彼女を抱きしめた。彼女は目を点にして――――そして、抱きしめ返してくれた。

この瞬間、僕らは確かに空へふわふわ浮いているように、そんな錯覚に陥ったんだ。

*

浮くんだ僕達はふわふわと、あの月の向こう側よりも高く高く
ふわふわと――――

ふわふわ浮かせて（後書き）

過去作でお茶濁し第三弾（笑）

まあ、甘いお話は好きです。甘いお菓子はもっと好きです。そんな感じで、この前食べたショートケーキと、チーズケーキは至福でした。

いや、それはどうでもいい。

次の更新こそ新作をアップしたい。うん。がんばるぞー。

久しぶりに君の名前を呼んでみた

元気がなくなつたと言えはそうかもしれない。若い頃のようにはいかないな、と言う台詞がぽんと出てくるあたり、オジサマ傾向なんだろう。現にバイトちゃんはそうやって僕を笑いながら切り捨てる。

情熱の炎つて言つたら青臭いけど、多分そうなんだろうな、と。炎は灯りになった。だから、今の自分が決してキライではない。君の事を愛してない訳じゃない。ただ以前に比べたら、愛してると言うのは恥ずかしいだけで。

ソファーに座つて、本を無造作にページをめくる。書店経営も20年。本に埋もれる事ができると喜んだあの時から数えてみて。自分は今、本より伝票を見ている時が多い。いや、本も多いか。だが、純粹に本を読めない自分がいて。

商売つ気が出た、と言う事か。本は売りたい。売れないと店が続かない。でも売れる本を望む人ばかりではない。日陰にいて、偶然の出会いで購入する層がいるのは事実で、例えば自分がそうなの。

理想はあつて。それは今でも変わつてなくて。なくなつてはいなくて。ただ生活があるし、せめて君との生活は守りたいし。来てくれるお客さんとの繋がりも消したくないし。

エンデにヴェルヌ、ルブランにドイルにモンゴメリ、デュマに那須正幹、乱歩にマーク・トウエイン――

名前を挙げたらキリがない本と言う魔法の担い手達。

ただ、こういう本に囲まれたくて、誰か他の人にも読んで欲しくて、そんな想いで、「魔法の本屋」を始めた訳だけど。

否――――そうじゃないか。

後ろのキッチンでリズミカルに、とんとんと。包丁を巧みに操り、魔法の使えない僕とは違い、まるで魔法のように具材を料理に変える君がいて。そこにいてくれたら安心で。

安心が当たり前のようになつて。

君に積極的に話しかける事が少くなつて。二人で一緒にいる事に満足している自分がいて。でも、と振り返る。

僕は彼女に何かをあげる事ができたのだろうか。
目を閉じる。

しばらく僕は、君の名前を呼んでない――――

「先輩、今度は何を読んでいるんですか？」

また来た。僕はあの時、その週になつてから数え切れない程の溜息をついていたはずだ。

興味本位で話しかけてきたのはよく分かる。浮いているだろう本の虫の僕に、

君は躊躇なく話しかけてくる。

僕は片目を閉じて、彼女を見上げる。迷惑さを演出、苛々も加味しながら。だが、彼女は質問の答えを待つ。

僕は短気なんだ。それを自覚している。だから、長期戦も長距離走も大長編と言われるジャンルも苦手なのだ。それを見越したかのように、彼女は毎度同じリアクションで僕を攻め入る。だが、陥落易しとでも言いたげな表情は彼女からは読み取れない。真摯な。真っ直ぐな。でも、茶髪に染め、耳にピアス、陶器のような碧の双眸にたじろぐ自分がいて。偏見？ 多分、そうかもしれない。そういう線の人達に線をさらに引く自分がいて。

「何の本を読んだんです？」

全く動じてないのか、気にしてないのか。彼女は僕の読んでいる

本を覗きこんでくる。ブックカバーがかかって、まして逆さから覗きこんでも分かるはずもないのに。

「……秘密の花園」

正確にはその原書なので邦文は一切無い。何度も訳文の方は読んだが原書の息遣いが知りたかったというのも理由の一つ。はつきり言ってスムーズには読めないから読書にはならないのだが、あらすじも世界観も知ってるからこそダイレクトな世界がそこにある。

訳者の言葉選び、表現をとっても感性や苦勞が偲ばれる。

「英語だらけ……」

君は絶句したのが何とも可笑しくて、多分僕は表情に出していたのかもしれない。

ほんの一呼吸。君と僕で、感情が交わった感じがして。

「先輩もマンガ読めばいいのに」

拗ねた訳でも無いんだろうが、彼女はボソリと呟く。どうしてか、彼女はいつも僕の世界に入り込もうとし、自分の世界に招き入れようとする。それは新鮮で楽しかった。少女マンガの世界を見せてもらえるとは思えなかったから、紛れもなく新世界だったと言える。

「先週のは、また続き読んでもいいかなと思ったよ」

何気なしに呟く。

僕の何気ない言葉は、何気なく彼女の耳をすり抜けて、そして戻ってきた。

ぼかんとした顔で。それが少しづつ色を為して。見てて面白いくらいに表情が変わる。

「先輩！」

「ん？」

「本当ですか?!」

いきなり力が入り、僕は苦笑した。その手がいきなり僕の手を握るモノだから、その苦笑も凍りつき、僕の方がドギマギしてしまう。慌てて離して、でもその時の僕は気付いてなかった。離れたのに距離が近い事実。

目を開ける。

近いのに距離が離れている事実。それを僕は今感じて焦っている。大切な事が当たり前になってきているというのは月並みか。

まさか、こんな形になって、という想いが今でも消えないまま、時間だけが経過していった感が強い。気付いたら一緒にいて――
――その言い方は卑怯か。

気付いたら、じゃない。

僕は彼女が傍にいる事を自然と望んでいた。

離していたのに近づく距離が、僕は面白かった。

伝票をテーブルの上に置いて、積ん読を繰り返していた本を手に取り。積ん読というよりは取り置きに近い。楽しみなのに仕事を優先してきた結果。それは仕方が無い。売れる本を仕入れる。そして客層が求めている本を仕入れる。そして客層が求めたものを店主は知り尽くす。その過程で、自分が本を好きだという事実が消えて。

「珍しいですね」

彼女は振り返らずに言う。僕の一挙一動が掌握されているのを感じる。その反面、僕は彼女を知り尽くしていない。知ろうとしなかった、単純にそういう事か。

「め、珍しい？」

何で声が上がっているんだろう。

「お仕事の書類が多かったでしょ？」

「――よく知ってるな」

「一緒にいるもの、それぐらいは見ているし、顔つきでだいたいはいち――」

無造作に無意識に出た言葉。彼女は一瞬、ぽかんとして、そして小さく笑んだ。しまった、と何故か僕は思い、慌てて視線を反らせ

る。

視線を反らせたのに、彼女はやっぱりあの時も僕の逃げた目を追いかけてくる。

「先輩」

いつもの場所で、いつも通りに。何も変わらなく、何も進展もせず。ただ彼女は遠慮無く僕の領域を侵して。それが当り前かのよう
に、距離を詰めて。詰めて。詰めて。

「賭けは私の勝ちですよね？」

ニツと笑って言う。嬉しそうに。無邪気というかなんというか。
僕らは賭けをした。期末試験で、彼女がトップ50に入るかどうかで。ちなみに彼女の成績は100位以下というのが大抵。僕は30位程度。秀才とまではいかないという何とも中途半端な感じが、何とも昔から僕であった。

そんな彼女が見事に50位の壁を打ち破った。

その結果は僕も見た。

無理だ、と僕自身が決めつけていたのに。

賭けは僕の進展しない現状維持で終わるはずだった。

だから、結果を掲示板で見た時は呼吸が止まる感じだった。

覆した。彼女が全力で。例え、49位というギリギリの立ち位置であつたとしても。彼女の記録を、彼女自身が打破したのは違いな
い。だから彼女が言う通り、賭けは間違いなく彼女の勝ちで、現状維持しかできない僕の大幅な負けだった。

彼女は僕が屈する姿を見たかつたんだろうか。勝利に酔って――

――とまで考えてバカらしくなった。それは単なる妬みだ。単純に僕は彼女を排斥しようとした。すればいい、できるなら。答えは決まっている。できる訳がない。だから僕は諦めの息をついた。
「で、何をリクエストしたいの？」

「いいんですか？」

「だって、その為に頑張ってたんでしょ？」

僕は軽く肩をすくめて。彼女はさらにその表情に笑顔を彩っている。

「先輩は優しいから好きです」

直球ストレート。最近ようやくわかりかけてきたが、ファッションに反比例してこの子には邪気がない。ピアスは相変わらずなんだが、それすら彼女の一部に思えてきたから不思議だ。達観した事実として、僕は頭が固い。単純にそうなんだな、と。

「名前で呼んでください」

僕は固まった。どんな無理難題がくるかと思ったが、まさかソレとは――。

「だって先輩、『君』しか言ってくれないし」

「なら君も僕のこと名前で呼べよ」

「いいんですか？」

しまった、と思った。彼女の目は躊躇ない。

「雅紀先輩、んー、これは普通。まさのり！ これじゃ私が尻に敷いてるみたいでイヤだなあ。雅紀君、これも普通」

「あ、あのもしもし？」

「まー坊！ 違うなあ。まーちゃん、これ可愛い。あ、でもごく嫌そうな顔してる。これはダメかあ」

「おーい、もしもし！？」

「はい？ もしもし？」

聞いてないのかと思っていたら聞いてた。なら聞けよ、と思うのだが、不毛なやりとりになって疲労感ばかり募るので大人の僕はぐつと飲み込む。

「なら聞けよ、って顔してる」

そこまで読むなよ。そしてまた不毛なやりとりが勃発する訳で。

僕は小さく息をついた。

「それは、僕をからかいたくて？」

彼女はぼかんとした顔で僕を見る。言っている意味が分からなかったらしい。

「だから、名前で呼ぶつてのは、僕をさらにおもちゃに――」

「したいのか、という嘆きは言葉にならなかった。彼女の真剣な目に呑まれた、それが正解か。僕はこの時から抜け作だった。普通に考えれば分かる事だ。成績を塗り替える事は容易じゃない。某通信添削塾の広報漫画のような突然、成績が好転する事は有り得ない。結局センスや才能、好き好きが土台にあったとしても、泥臭い努力の積み重ねが成果になる。その事を僕は痛感していた。追い越そうと思っても追い越せないのは、トップを走る彼ら彼女らの努力は累積し蓄積した結果、循環し、さらに力を得た故だ。

だから、彼女の努力も並大抵ではなかったというのは肌でも感じる。

これは侮辱だ、言ってみたら。さすがにこの子だって、ここまで言われたら僕に愛想を尽かす、殴られても罵倒されても文句は言えない。あの時の僕はそう思って、それを覚悟で目を閉じた。

「決めた――」

彼女は絞り出すような声で、ぐいつと僕の――両方の耳朵をぐいつと引つ張る。る？　僕は自分でも目を白黒させているのが分かるくらい動揺していた。

「先輩、よく聞いてくださいね」

と彼女はさらに耳朵に力をこめる。多分、よく耳の穴を広げて聞けの意なんだろうが、両耳される意味がわからない。かくいう当時の僕は痛さ云々より、彼女の真剣さに呑まれて、悲鳴すらでなかった。

「私は先輩をまー君と呼びます。だから先輩も私を千沙つてちゃんとよんでください」

宣言する。

僕はコクコク頷く。

「名前で呼ばれて、なんかスタートできる気がするの。」

彼女はにつこり笑って言った。その顔が少し上気している感じがしたのは、きっと彼女自身が精一杯、頑張りを見せていた証拠なのか。

まー君で、千沙か。

僕らが言うのか？

無理というか、悲壮感というか。何回目かの息をつく。妙な緊張感を残して。彼女は満面の笑みで返してみせた。

「でも、結局、名前で呼んでくれなかったんですよ、まー君は」
彼女が僕のとなりに座っていう。その前に、置いた二組のコーヒークップの一組に手を延ばし、そっと口をつけた。

さり気ない、というのか彼女の仕草にはびつたりだ。この近すぎる距離を適度に保つ。

「だけど、とことん追い詰めたよな」

僕の一言に千沙は意地悪く笑った。

「契約不履行をする方がひどいと思いませんか？」

「やり口がなおひどい」

「でも私はまー君にあやって呼ばれるの、好きです」

この期に及んで何を言うのか。

「今思うけど、ちーは計算高い」

「まー君が分かりやすいんです」

さらっと言ってくる。

僕はため息をついた。

どうしてもあの時、僕は千沙の名前をよんであげられなかった。今考えてみるとヒドイ話で、約束を徹底破棄したいのだから、侮

辱以上のモノだと思っただが、千沙の執念はそれを上回っていて、僕に『ちー』と呼ばせる事で結論づけた。これ以上、拒否権が無い事は千沙の目が物語っていたが、さらに冷静に考えると、普通に名前で呼んだ方が、周囲の視線を思うとまだマシだったんじゃないかと思う。

案の定 - - - -

「まー君！」

大音量とはこの事か。僕は購買でアンパンと、その他惣菜パンとコーラを買い込んで読書に没頭するつもりだった。さつと食料を購入したらいつもの場所に移動、というスケジュールが、千沙のおかげで、全て台無しだったりする。

沸く人の壁に人の壁。多感な高校生達は、だれがだれと付き合ってた云々は甘味以上に魅力的なメニューに違いない。

「本多、お前、いつから！」

「奴が裏切りやがった！」

「あの子、一年の高橋さん？」

「高橋さんと本多、なんか意外？」

「千沙、本当なの？」

「なんか、本多が照れてる。あいつ、そんな顔するんだね」

何から何まで余計なお世話だ。が、千沙はニコニコして、僕を見返すのみで一步も動かない。何かを要求しようとしているのは目に見えて確かなのだが - - - - 要求してるな。最近、千沙の行動の一つ一つの意味がわかるようになってきた気がする。

無視していいこうとするも、千沙ががっちり僕の腕を掴んで離さない。

「なんだよ？」

千沙はニコニコ笑うばかり。周囲も怪訝な顔で僕らの様子を伺っている。公開処刑か、これは。

僕は小さく息をついて、覚悟を決めた。

「行くぞ、ち、ちー」

どもってしまった。いよいよに千沙に踊らされている気もするが、千沙も周囲もそんな事は気にしていなかった。

「うん」

満面の笑顔の千沙と、周囲のどよめきと。

駆け足で逃げ出すように、この場を去るしか無い。千沙は弁当持参だから、購買に来る必要も無いのだが、間違いなく計画的犯行と言わざるえない。

「ちー、お前なあ」

ため息を一つ。千沙は嬉しそうに笑うのみだ。どう考えても、かわれているようにしか思えないのだが、千沙から悪意を感じないので、結局拒絶できない僕がいて。

むしろ千沙が僕ををぐいぐい引っ張って疾走していく。僕は息を切らしながら、彼女についていくのに必死だった。

「まー君は楽しいね」

ボソリと言う。

「意味がわからな、い」

句読点の間は、息切れである。

「なんていうか、人付き合い悪いのに、嫌いじゃないんだね」

「嫌いだよ」

面倒くさいと言う。

「本当に嫌いだったら、私を拒絶してると思う」

「た、確かにね。ちーが良い性格してるんだと思う」

「まー君の事をもっと知りたいだけです」

「もっとおもちゃにして遊ぶのか？」

また言っではいけない事を口にする自分がいる。なんでこんなに僕は擦れてるんだろうか。正直に受け入れられない自分がいて。開

きかけた扉を閉じてしまいたい、そんな衝動すらあつて。

「そうだなあ。私だけのオモチャにしたいという欲求はあるかも」

その目が真剣そのものなので僕はたじろぐ。分からない、こんな男の何に興味をもっているのか、が。

「まー君は、嘘が少ないから」

「は？」

「着飾った嘘をつかない。嫌と好きがはっきりしてる。私から見たら坊ちゃん育ちだけど、隔てなく接してくれたから」

「そりゃウソだ。僕は隔ててたぞ？　ちーみたいな人達は僕は苦手だったから」

二人の足が自然と止まる。

千沙は無造作に耳のピアスに手をを触れる。僕は小さくコクリと頷いた。

「このピアスを外したらまー君はもつと私の名前を呼んでくれますか？」

より真剣に千沙は言葉を重ねる。千沙の求めているものは、僕なものには理解ができない深淵のような気がして。そこに手を触れたら後戻りはできない気がして。そこまで思うが、僕は迷いなく首を横に振った。

「そのままです」

「え？」

「千沙はそのままでもいい」

千沙は固まったように僕をみる。

「――――名前」

「え？」

「まー君が名前を呼んでくれ、た」

絞り出すように。小さな感情がやがて波紋を、波状が波となって、小さな津波が、蓄積した感情を炙り出して。

慟哭を。

名前すら呼べなかった僕が、その慟哭を体で受け止める。

後に知るのは、千沙には名前を読んでもくれる相手がいなかった事実が一つ。

千沙が生まれてから本当に一人ぼっちだった、という事。

この時はそんな事知るよしもない。

恥ずかしげもなく、ただ千沙を抱き締めて。

ただ何かが変わる気がして。

コーヒーを飲み干しながら、僕は千沙を見る。変わらないようでも変わって。僕は店を始めた。千沙は千沙で自分の仕事をもって。子どもも授かって。だけど、あれからここまで一緒に歩んできて。一緒にいる事が当たり前になって。また、名前を呼ばなくなって。名前をよばなくても、通じている気がして。

と、千沙も僕のことを見ていた。いつもなら、目を逸らしてしまう所だが、今は千沙の視線を受け止める。

「何を考えていたんです？」

「千沙なら分かると思うんだけど？」

少し驚いた顔をして、でも嬉しそうに言葉を続ける。そうか、僕は無意識に名前を呼んでいたのか。

「私はまー君が思ってる程、まー君の事分かってないんですよ？
こんなに一緒にいるのに」

少し歪んだ表情で。もつと知りたいのに分からない。そう言いたそう。こんなに一緒に歩んでいるのに。まだまだ足りない、と。

「ちーと出会った時の事を、ね」

「え？」

「事細かに思い出していた」

僕は微笑を浮かべて――千沙は耳まで真っ赤にして。

僕は怪訝そうな顔をしていたんだろう。千沙は必死の弁明を試みってきた。

「だって、だって、あれは私、すごく勇気をだして！だしてだして！頑張って頑張って」

さっきまで一緒に思い出していたじゃないかと思ったが、事細かに回想しているとは思わなかったんだろう。ただ僕視点で感じていた事と、千沙の想いは違ったようで面白い。

「僕はちーが、動じてないのかと思ったよ」

「そ、そんな訳ないじゃないですか！」

俯きながら、吐き出す。そうだな、と思う。一緒にいて分かったことは千沙の弱さや、しまいこんでいた感情が随分と圧縮されていた事。妊娠の時、それがかなり顕著だった。そして愚かにも僕は、その事すらもすっかり忘却していた事だ。

「なんで僕だったんだ？」

「まー君は私じゃ不服ですか？」

この言葉の裏返し。僕は、いつも千沙に翻弄されつつ隠されてしまふ。

千沙は核弾頭級の言い方で、言葉を修正――という名のトドメを刺しにきた。

「私がまー君が良かった、と以前も言いましたよ」

あっさりと。

「僕は、千沙がいてくれて良かったよ」

言えた。千沙は言葉を失って、僕を見ている。言えたんだ、気取らず、意識せず、ただ君の名前を。言いたかったんだ、と思う。気恥ずかしさや建前なんていう愚かなもので、僕はそれを隠してきた。「ズルいです、今まで呼んでくれてなかったのに、交互にたくさん呼んでくれるなんて」

俯き、僕の手をぎゅっと握る千沙がいて。握り返す僕の手は、ま

るで10代の頃の僕らを彷彿させるように、脈を跳ね上がらせていた。

「まー君」

「ん？」

「本当は、あの時リクエストしたい事は別だったんです。今、リクエストしていいですか？」

「今？」

「今……」

千沙はそつと、僕の耳元で言葉を囁く。

躊躇するが、その弱虫加減をぐつと飲み込む。

千沙は目を閉じて待つ。

本当は。

本当は。

こうされたかったです。

今まで、された事はなかったから。

一緒に走ったあの日、してもらったようなものだから。叶ったと自分では諦めたけど。自分の口で、好きな人にワガママを聞いて欲しくて。

渋い顔をしていても、まー君は、きつと聞いてくれると信じていたから。

ワガママ一杯に抱き締めてもらいたかったです。

僕は迷わない。一瞬、覚悟が必要だったけど。

千沙の想いの通り、ただ抱き締めて。

40歳を越えた少年少女がいてもいいじゃないか。僕ら、これだけの回り道をしてもし足りないくらい、まだ分かり合えてない。でも、ここに一緒に生きる奇跡は感じている。

だから……。

それに付け加えて。僕は何度も何度も君の名前を呼んでみた。

久しぶりに君の名前を呼んでみた（後書き）

アラフォー夫婦をテーマに書いてみたらこうなった感じで。

書き上げたい作品の前にこれができるあたりが苦笑もの（笑）
プロット的には掘り下げたいネタはたくさんあったのですが、まあ
また精進します。ここまで読んでくれた皆さん、お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523w/>

モノガタライズ

2011年12月20日21時45分発行